

西宮文学案内

平成24年度 秋期講座 第1回「阪神間の酒と文学」

日時：2012年9月23日（日）15時30分から

場所：西宮市立中央図書館 集会室

講師：河内 厚郎（文化プロデューサー）

小西 巧治（西宮芦屋研究所 副所長）

河内 本日、西宮の酒をとりあげましたのは、地酒がブームなのに比べ、灘の銘酒のブランド力が落ちているのでは？との危惧もあり、まず文芸作品に登場する地元の酒から見直してみたいと考えました。それで酒会社に「そういうリストはありますか」とお聞きしたのですが、大関さんからは、角田光代さんの『対岸の彼女』に「酒は大関」とつぶやくシーンがある、という一回答。日本盛さんは回答なし。白鷹さんはリストをお持ちで、白鷹禄水苑の庭の奥にある資料館に白鷹と白鹿を並べて展示してあります。

急なお願いなので、なかなか出てこなかったのでしょうか。皆さんも何か御存知でしたら文化振興財団のほうにメールを送ってください。また改めてちゃんとしたリストを作ってみたいと思います。

最初に紹介されている田中貢太郎と言う人はあまり知られてないかと思いますが、阿川弘之の『ふなゆら』には「とつときの白鹿だ」とあります。阿川弘之さんは阿川佐和子さんのお父さんですね。昔、「さっちゃんはね」という歌がありましたが、さっちゃんとは阿川佐和子さんのことだとか言われています。作詞した阪田寛夫さんの娘さんは大浦みずきという宝塚スターでしたが、阪田さんも大浦さんもなくなりました。

それから、藤本義一・舟橋聖一・吉村昭…どの方の文章にも酒が出てくる件りがありますので読んでいただければと思います。

西宮には大手の酒造会社として白鹿・白鷹・大関・日本盛…とあるわけですが、大関さんの有名なポスターを描いた画家は、甲東園に住んだ寺島紫明でした。『細雪』に出てくるような阪神間の美人画の大家で、大関がコレクションを持っているはずですが。震災の頃、大関美術館をつくるとかいう噂が流れましたが—

「白鹿の歯に沁みわたる秋の夜の酒はしみじみ飲むべかりけり」の若山牧水は人気の高い歌人で、放浪の歌人とも、また酒仙とも言われました。亡くなったときに死体がアルコール漬けのようなもので腐らなかったとか。

「津の国の伊丹の里ゆはるばると白雪来るその酒来る」「手にとらば消なむしら雪はしけやしこの白雪はわがこころ焼く」

伊丹市は役所が熱心に資料を集めています。町の中にいろんな句碑や歌碑が建てられていまして、昆陽池の周りには和泉式部をはじめ多くの歌人の碑が建っています。伊丹市は「言葉文化都市」を標榜し、新しくオープンした図書館の名も「ことば蔵」。蔵とは酒蔵を

意識しているのでしょうか。JR伊丹と阪急伊丹の間という限られたゾーンに、柿衛文庫や市立美術館、白雪の本社…いろいろな文化施設も集められています。JR伊丹から西へ向かう道には江戸時代らしい建物の店舗を誘致して、猪名野神社の門前は芸術家の工房街…という具合に、ゾーンをはっきり定めて伝統と芸術を大事にしています。西宮の場合は町が広いですから絞り込みにくいのですが、このあと時間がある方は酒蔵通りまで歩いていただきます。今フランスの芸術家の照明が評判です。

次に鉄道唱歌を載せました。「神崎よりはのりかへて ゆあにのぼる有馬山 池田伊丹と名にきゝし 酒の産地ともとほるなり」 神崎とは尼崎駅のことですね。東海道線から福知山線へ乗り換える歌詞となっています。

芦屋に住んで94歳まで生きた歌人・詩人、富田碎花の旧居が阪神打出駅の近く、宮川町に残っていますが、「しんとろりこはくのいろの滴りの澄めば澄むもの音のかそけく」という碎花歌碑が庭に建っています。この酒が灘の酒かどうか分かりませんが、まあ灘の酒も飲んだことでしょう。富田碎花賞という現代詩の詩集を対象とした文学賞を芦屋市が制定しており、この旧家も曜日を決めて公開しています。ここは戦前に谷崎潤一郎も住んだ家です。

田辺聖子さんの『女の日時計』は西宮の造り酒屋に嫁いだ女性の女心を描いていまして、お屋敷が夙川沿いにあるということになっています。

それから角田光代さんの『対岸の彼女』。

吉田健一というのは、いま渡辺謙さんの主演する吉田茂の伝記ドラマをテレビで不定期にやっていますが、あの総理大臣を務めた吉田茂の息子です。戦争から復員してきた青年という設定でドラマにも登場します。64～5歳で亡くなりましたが、飲み屋では盃を持った手を下に降ろすことがなかったとか。菊正など灘の酒のファンで、パンも酒もおいしい町は文明度が高いと神戸を持ちあげていました。何しろ父親が総理大臣をやっているときに勘当され、ケンブリッジへ留学もした。息子は銀座でルンペンをやっていた、原稿料が入ると酒代に替わってしまう。家に何もないので出版社が同情して机を置いていったといったエピソードもありました。「酒は我を忘れるのではなく我を取り戻すもの」という名言が彼にあります。たしかに酒をしみじみ飲むと、ふだん気がつかない虫の声が聞こえてくるとか、何でもない気配が感じられたりします。背の高い大男で、昭和30年代かにデパートの屋上のビアガーデンの早飲み大会へ現れ悠々と2杯飲んで去っていった。ただで飲めるところはチェックしていたのでしょうか。吉田健一の有名なエピソードとしては、第一生命の本社のビルに入っていたマッカーサーのGHQが、よほど暇だったのか、日本の乞食の思想調査というものをやった。そのとき吉田健一がたまたま引かかったところ、何しろケンブリッジ仕込みでシェークスピアの文句も諳んじている。アメリカの将校とは大違いですから、日本の乞食というのはすごい教養人だなと感じ入りさせたという、嘘のようなエピソードがあります。センテンスの長い文章を書き、晩年は句読点が一切ないような延々うねうね続く文体を作りだしました。

さて、清酒発祥の地は伊丹ということになっています。1600年。覚えやすい。1600年といえば関ヶ原の戦いが有名ですが、この年に関ヶ原の戦いと、清酒の発明、2つの事件がありました。

場所は伊丹の鴻池村で現在も鴻池という地名が残っています。猪名川より武庫川に近い伊丹市の西のほう。宝塚市の小浜という戦国時代から続く古い町から南へ降りて行ったあたりで、碑が建っています。尼子氏に仕えた山中鹿之介という戦国時代の武将の子の山中新六が戦乱を逃れてこのあたりにやってきた。叔父さんがいたそうです。その後、山中家の使用人が主人に怒られて出奔するとき腹いせに、作っている酒を使い物にならないようにと灰を掘り込んだら、翌朝、濁り酒が透明な酒になっていたと伝えられています。落語や松竹新喜劇でもこの話をドラマ化しています。科学的にも、灰を使うとにごりが取れると証明されているらしく、本当はもっと古いのかもかもしれませんが文献に残るものとしてはこれが一番古く、伊丹の町中には「清酒発祥の町 伊丹」と看板が出ています。

伊丹の酒は「丹醸」という高級ブランドになり江戸でもてはやされました。最初は陸路で運んでいたのが、猪名川を下って海路で運ぶようになると、灘のほうが海沿いですから大量に運んでいける。私は日本の資本主義はここに始まると思っているのです。

ヨーロッパでなぜ資本主義が起こったか。それを解明したのが、ドイツの有名な社会経済学者マックス・ウェーバーで、マルクスに匹敵するくらい有名です。

アルプスの北側で宗教改革が起こり、南のカトリックに対抗して、ローマ教会に従わない新教徒が起こってくる。最初はラテン語で書かれていた聖書をルターがドイツ語に訳した。日本でもサンスクリット語なら訳が分からないので却って有難いとか言うけど、それを日本語で書いたというようなものですね。

次に、スイスにカルバンとかカルビンとも言いますが、この人はスイスの人です。カトリックではお金を儲けることに罪悪感がある。といいつつ実際にはラテン系のカトリック教徒というのは懺悔したら後は何してもいいとか現世享樂的な生き方をしている人も多いわけですが、建前としては、お金を貯めこんで贅沢をするのは後ろめたい。しかしカルバンは、働いてお金を稼ぎ、それを遊んでしまわず次の事業に投資して、より多くの富を生み、それをまた投資していくことは、よいことであるとした。聖書にも「産めよ増やせよ地に満ちよ」という言葉がありますが、事業を拡大していくことは後ろめたいことではないと説いたものだから、資本家のモチベーションが高まる。人間、欲望だけで生きていたらむなしいものですが、自分のやっていることが正当化されると働くことがどんどん楽しくなってきますよね。ドイツやオランダやイギリスに近代工業が起こってきたのは、勤勉というモラルを納得いくように説かれたからで、そういう労働意欲を増進させる考えがラテン系では育たなかった。ラテン系では喜捨するとか慈善事業みたいに施すという発想しか出てこなかった。より高い富を生み、よりたくさん産業を興すという発想はアルプスの北側に生まれましたが、資本主義の発達にはこれが大きかった。日本の江戸時代にも、日本なりの儒教とか勤勉が一つのモラルとしてあり、それが資本を蓄積し手工業

から近代工業へと移って日本資本主義が成立していくわけですね。初期プロテスタントと資本主義の精神に似ています。現に鴻池は酒造りという産業資本主義から金融に進出し、両替商として巨富をうむのである。

もう一人、ドイツにゾンバルトという経済学者が出ます。日本ではあまり知られていないようですが、この人はヨーロッパ人の家計簿を調べた。中世から近代にかけて、理由は分かりませんがプレゼントブームが起こるのです。羊飼いの青年が一生かけ貯めたなけなしのお金で美しいブローチを買って貴婦人に送るとかいう非合理的な流行が起こる。

昔は子供がやたら死にますから、とにかくたくさん子供を産んで、一番優秀な男の子と一番綺麗な女の子くらいは結婚させる。あとは一生羊飼いか台所仕事とか残酷なものです。産業革命が起こり田舎から都会に労働者が出てきて家庭の生活を営めるようになるのは産業革命から後で、日本でもそれまでは奉公人は一生奉公人というか、よっぽどうまくいったら暖簾分けしてもらえましたが一羊飼いがいつも遠くから見ている貴婦人に恋愛感情を抱き、なけなしのお金で素敵なブローチを贈る…バレンタインチョコなんかもそうですが、一斉に異常な消費ブームが興ると、技術も高まり、デザインもよくなり、都市のギルドに資本とアイデアが蓄積されて産業革命が起こってくる。美的無駄遣いこそが新しい消費を生み、そこへ文学、宗教、音楽、いろいろなものも連動していく。阪神大震災のとき、自粛自粛でバレンタインデーに神戸のチョコレート屋さんが困ってしまった。ああいう時こそ儲けさせてあげたらいいのに。ゴルフ場にいたら右翼が「非国民」と空から叫ぶ、兵庫県が一番ゴルフ場が多いんです。バレンタインチョコとゴルフ場で兵庫県が儲かるようになっているんだから、自粛せず、お金を使わせないとー

というわけで、ウェーバーとゾンバルトの2説はどちらも当たっていると思います。体系的な勤労意欲を持つ一方で、文化的な無駄遣いをする。その両方が合いまったときに巨大な物資の流通が起こる。

先ほどの1600年というのを思い出していただきたい。関ヶ原の戦いがあり、清酒の発明が伊丹であった。1603年に江戸幕府が出来ると、やがて世界最大の都会となる。人口100万人。ロンドンやパリは3、40万で、大阪も3、40万、これが普通の大都会です。大阪は生産と消費が近接してバランスが取れているのですが、江戸というのは巨大な消費オンリーの町で、単身赴任の男がものすごく多かったです。空っ風でいつも火事が起こり、5月ぐらいになったら商家の奥さん連中が郊外に避難しているほど。火事があると、すぐ工事が始まる。材木が集まる。東北や甲信越の左官屋さんや大工さんはいつ江戸へ出稼ぎに来ても即仕事があるから、宵越しの金を持たない。でも家康が乗りこんできたときは産業基盤もなく、漁業も東京湾に発達していませんでしたから、摂津・佃（大阪市西淀川区）の漁師を東京へ連れてきて佃島を開かせ、そこから佃煮とか出来てくる。醤油もない。関西からいろいろなものはいくのですが、その中で一番の消費財は酒だったでしょう。単身赴任の男の町ですから遊郭が出来るけど、ろくな酒もない。そのときちょうど將軍お墨付きの最高級の酒が伊丹に出来たので大量に輸送する。これで東海道の交通が発達して

海路も発達する。

最低限の生活をするには必需品ですみますが、さらに飛躍しようとしたら無駄遣いしないといけない。意味のある無駄遣いしたときに経済が大きくなる。今の日本はなかなかそれが見つからないので苦しんでいます。作ってばかりでも買ってくれないと話になりません。

明治30年代に夏目漱石と正岡子規が東京の町を歩いていて、牛込の早稲田の辺りかな、山の手の内側にまだ田畑があった。漱石と一緒に歩いている子規に向かって「あれは何か？」と聞いたという。子規はびっくりして「君が食べている米、稲だ」。漱石ほどのインテリが生産の現場を知らない。熊本へも行っているから分かりそうなものだけど。

阪神間は首都圏に比肩する消費文化を持っていますが、武庫之荘や門戸厄神あたりにもまだ田んぼがあり、生産と消費がバラバラではない。しかし江戸東京は昔徹底的に消費の町なんです。テレビ番組でも大阪のテレビ局が少ない予算で懸命にアイデアつくると、すぐ東京がマネする。人材でもアナウンサーが育たないというので赤江珠緒さんや山本モナさんを引っ張っていく。ギャラがいいから向こうへもっていかれてしまう。最初のアイデアは大阪で作っていることが多いのに。

日本全体の消費を牽引してきたのはまちがいなく江戸という巨大な消費の都で、その消費が摂津を中心とする畿内の高度な生産業、醸造業とかと同時に進行したときに東海道の大動脈が成立した。生産と消費がかみ合って近世の町人社会が生まれてきた。

酒は日本の近世文化に大きな影響を与えました。18世紀になると中心は灘のほうに移っていきませんが、阪神間は醸造業が一大産業で、今はありませんが尼崎には醤油もつくられていたそうです。

神戸夙川学院は平清盛がどんな食事を食べたか復元しようとして、なかなか苦労しています。清盛の時代はまだ醤油がない。醤油は鎌倉時代に中国から帰ってきた坊さんが金山寺味噌を伝え紀州の湯浅あたりでたまり醤油が出来た。砂糖もまだない。塩はもちろんあります。

中世の文献には「摂津の産」とあり、どこかよく分からないのですが、たぶん尼崎と西淀川区の境目あたりが海産加工物の先進地域でした。天ぷらやかまぼこの類は、阪神間の海岸線が深く入った大阪と尼崎にまたがるあたりに発達し、その流れで缶詰なんかを作っている。東洋食品工業短期大学が川西にあります。

宝塚へ行きますと、花屋敷から山本、中山にかけては植木の産地です。接ぎ木を発明したことで世界的に意味のある場所です。

そう考えると、阪神間というのは、醸造業、海産加工物、接ぎ木…素材をそのまま提供するのではなく、素材を発酵させたり、付け足したり合成したりして新しいものを生み出してきた、つまり付加価値をつけるのがうまかったところということになります。

ですから、お酒はお酒、文学は文学と別々に考えず、文化芸術、酒と食品とをセットで考えてみてください。

芸能関係の酒もあります。昔、文楽という酒もありましたし、寿海という酒は市川寿海という歌舞伎俳優の名前から採りましたが、市川雷蔵の養父が寿海という名でした。

グリーンタウンの横、夙川沿いに成田家という最中屋があり、市川團十郎家の最中をつくっています。成田家（屋）というのは市川家の屋号でもあり、団十郎・海老蔵親子が鼻唄先に配る最中を作っているのはあそこだけです。大阪だけでなく東京の興行でも販売しているわけで、そんなことを知っていると、町を見る目も変わります。今、阪神間は洋菓子文化が活発ですが、和菓子もいっぱいある。和菓子も洋菓子もある町というのをアピールするためにも、どんな文学作品に出てくるのかもっと調べてみたいと思います。

このあと小西巧治さんが「宮水と灘の酒と文学」というお話をされます。10月11日にノーベル文学賞の発表がありますが、目下、村上春樹さんがナンバー1候補で、2番目はボブディランだそうです。村上さんは精道中学を出ているので、芦屋市が毎年手ぐすね引いて村上春樹の小説に出てくる打出の公園に園児たちを集めてアピールしたりしています。しかし西宮の浜脇小学校・香櫨園小学校も村上春樹の出身校なんですね。北口のジュンク堂ではカウントダウンのイベントを企画している人がいます。

というところで、今、団塊の世代の星と言われる小西巧治さんです。

小西 小西巧治と申します。団塊世代の星と言われて恥ずかしいんですけど、今からお話します村上春樹と同じ学年です。お話します「世界に誇る文学を醸し出した宮水と灘の酒」という副題は誰のためにつけたかという、実は村上春樹のためにつけたというようなタイトルです。

なぜ村上春樹とお酒とが関係があるのかというところですけど、村上春樹と酒といいますと思えばのは洋酒なんですね。ビールはハルキの日常のシンボルということで。例えば彼のデビュー作『風の歌を聴け』の中に、二人がひと夏かけて25メートルプール一杯分のビールを飲み干したという文章だとか、お酒飲んで車を運転するとか、今では考えられないようなことがいっぱい出てきます。この作品でなくてもビールと登場人物との関係がどんどん出てきます。

ウィスキーでは『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』という傑作の中でも「この世で一番おいしい酒」という表現を使っていますし。「もし僕らの言葉がウィスキーであったなら」というスコットランドのウィスキーの産地の紀行文です。村上春樹の小説の中で日本酒飲んでいるという話あんまり聞かないのに、なぜ副題と関係するかといいますと、村上春樹は日本酒と造り酒屋の…さきほど河内先生が文化的なものを作ったのが酒造家というお話がありましたけど、どっぷり浸ったのがこの人であるということが言えます。

村上春樹は『辺境近境～神戸まで歩く』で。震災2年後に阪神西宮から神戸まで歩いたのを残した作品があります。村上春樹と阪神間・西宮と芦屋の関係がこれを読めば分かる作品です。「僕は戸籍上京都の生まれだが、すぐに兵庫県西宮の夙川というところに移り、

まもなく芦屋市に引っ越し10代の大半はここに送った」。京都の伏見で生まれたんですが、酒どころから酒どころに来たというのが村上春樹の経歴なんです。西宮の清酒白鹿の社宅へ入った。というのが村上春樹の生い立ちであるということです。

彼の少年時代を振り返ってみますと、京都に生まれて西宮の浜脇小学校に入学しました。3年の時に香櫨園地区の子供が増えたので、そこに集団転校した。その香櫨園小学校を卒業して、家はまだ西宮にあったんですが、越境入学で精道中学に入りました。精道中学を卒業して神戸高校に入り、一年浪人して東京の早稲田大学へ入進学したというのが村上春樹です。

小学校の頃から文才があったんですが、高校時代は宿題で読書感想文が出ますと、4つも5つも違う観点の感想文を書いて友達に売りつけていた。そこで彼は原稿料を取る味を覚えたという風に言われています。大学は7年かかって卒業したのですが、途中、ジャズ喫茶を開きました。

先ほど白鹿の社宅と言いましたが、これは甲陽学院の先生の社宅です。戦後、私立の甲陽学院が旧帝大クラスの大学を目指すような学生を育てようという目標を立て、大学で教えられるレベルの先生をと大学や師範学校から優秀な先生を招聘した。この中に村上春樹さんのお父さんである村上千秋さんがおられた。甲陽学院というのは清酒白鹿の辰馬家、一部白鷹の辰馬家の方も関係しておられますけれど、その援助により創設された財団法人辰馬学院甲陽中学に始まる中高一貫です。そこへ甲陽学院の先生として来たお父さんに子供がついてきたということです。

ここで村上春樹ワールドというのを見てみたいと思います。ここが夙川の河口、回生病院で香櫨園浜ですね。ここに甲陽学院があります。村上春樹が入ったのは、ちょうどこの北側に社宅があり、ここは今は辰馬企業という駐車場になっていますが、そこに住んでみたいですね。ここをちょっと北の方に行きますと、酒蔵通りのどん詰まりになりまして、ここが香櫨園小学校ですが、その前は浜脇小学校に入学していた。このへんの子供の数が増えて学校がいっぱいになったので香櫨園小学校に集団転校した。本来、私と同じ学年ですから浜脇中学校に来るべきだったんですが、越境入学で精道中学へ行きます。村上春樹は一回川添町に引っ越しています。村上春樹のエッセイや小説を見ていますと、出てくるのがだいたいこのへんですね。西宮神社があり、阪神西宮駅のほうに旧西宮市立図書館。酒蔵通りの一番東の端の甲子園球場も出てきます。これが彼の少年時代の一つの世界になっています。2回の引っ越しについてこういうことを言っています。「西宮の夙川の西側から東側へ、そして次に芦屋川の東側へと移っただけのことである」芦屋川の東側というのは幅が広い。実際は宮川の横に西蔵町という町があります。そこへ移った。ご両親は地震までそこにおられたんですが、家が壊れたということで京都へ戻られた。お父様は4年前に90歳近くでお亡くなりになったということです。

夙川の河口から2つ目にある橋ですけど、最近いろんなところで取り上げられています。村上春樹の『ランゲルハンス島の午後』に出てきます。家はこのへんにあったわけですが、

中学生の時に生物の教科書を忘れ先生から取りに帰れと言われたとき、この橋を渡ったときの情景が書かれています。最近、教科書を取りに帰れと言った先生にお会いしました。先生はその話知らなかったんですね。この本を買って差し上げました。そんなことあったかなとおっしゃっていましたが、かなり村上春樹のことは詳しく覚えておられました。

さきほど転校したと申し上げましたが、3年生の12月24日、クリスマスイブの日に、当時飼っていた山羊を2匹先頭で香櫨園小学校に転校しました。この時まで完成してなかった43号線のほうを回って転校したそうです。春樹少年が見た山羊というのは香櫨園小学校で飼われました。子供と仲良しで。これが村上春樹の小説の中にも何個か出てきます。『風の歌を聴け』でも、人のよい山羊という形で。あるいは『1Q84』でもコミュニケーションで飼われた山羊を子供たちが世話をする。これらも彼の原風景が小説の中に出てくる。

今日お話する酒造家との関係は『海のカフカ』と西宮です。『海のカフカ』は2002年に出された小説で、『ノルウェーの森』が一番よく売れている小説ですけど、割と海外で評価されているのは『羊をめぐる冒険』と『海のカフカ』です。私、初めて読んだときに「何でこんなに西宮の景色が出てくるんだろう」という風に思ったわけです。ただ当時は人前で話をするほど自信がなかった。新聞なり文芸評論家の先生に支持していただいて自信を持てるようになりました。

『海のカフカ』について村上春樹が語っている中で、パリレビューというアメリカの雑誌の記者に「この小説の15歳の主人公の少年について書こうと思うとき、僕はそのために必要な一つの抽斗を開けます。そうすると僕が少年として神戸にいたとき目にした光景が完全にそのまま浮き上がってきます」と言っているんですね。ここで村上春樹は外国人に話をするとき西宮とか芦屋とはいいません。必ず神戸という言葉で故郷を表現しています。

『海のカフカ』がどういうストーリーかと言いますと、東京の中野区野方から四国の高松市に移り住み自立することを願う主人公の僕と、同じ野方に住み猫と話ができる不思議な老人ナカタさんに次々と起こる。また過去に起こった出来事をパラレルに進行する。これだけ読んだらわけの分からない話ですけど。さらに15歳の少年、田村カフカは家出するのですが、あるきっかけで四国の小さな個人図書館、甲村記念図書館で暮らすことになる。そこで彼は不思議な過去の幻影に出会い、否応なしにそこに巻き込まれていくという。あらすじ読んでも分からないし、本を読んでも分からない小説ですが、ただ我々村上春樹ファンには惹きこまれてしまう小説なんです。この小説は、おわんやま事件から始まるんです。「それは私たちがよく遠足に出かける山でした。お椀をふせたような丸い形をしていて、私たちはおわん山とよんでいました。それほど険しい山ではありません。誰でも簡単に登れます」。これ読むと何を思いたすかといえば、西宮の人ならすぐ浮かんできますよね。甲山のことです。村上春樹は香櫨園小学校から甲山まで遠足で歩いて行っています。今はマラソンをする作家として知られていますけど、当時は持久力がなくて苦痛だったと友達の証言から聞きました。

この甲山を明治時代の神戸へ来たお雇い外人はビスマルク山といったそうですね。ビスマルクの頭はこんな頭だったんですね。

『海辺のカフカ』の甲村記念図書館のモデルは旧西宮市立図書館、アミティーホールあたりにあった図書館がモデルなんです。しかし対抗馬がありまして、世間的には芦屋市立図書館打出分室だと言われています。無視できない存在ということです。状況証拠は絶対西宮の図書館なんですけど向こうは今現存している。甲村記念図書館の館長の言葉「甲村家は江戸時代から続いている大きな造り酒屋で、先代は書籍の収集にかけては全国的に知られていました。このように第二次世界大戦の時代におきましては、地方行政政府によってではなく、主に甲村家のようなディレクタント的な生活を持つ素封家の手によって、豊かな地方文化が生まれたのです」ディレクタントは好事家ということで、甲村家というのを辰馬家に変えたらまさにその通りです。村上春樹のお父さんは辰馬家が経営している甲陽学院に勤めていた。その息子が知らないわけがないんです。

もう一つ、『海辺のカフカ』に高松の神社が出てきます。『ランゲルハンス島の午後』で村上春樹は、ここが自分の遊び場だったと言っています。「中央商店街を抜けて通りを渡るとそこは西宮のえびす神社。とても大きい神社だ。境内に深い森がある。また小さな子供だったころには僕ら仲間にとっては素晴らしい遊び場だ」。西宮で育った人なら、あそこで牛乳瓶にうどん粉入れて海老を釣ったという記憶があると思うんです。村上春樹そのことを書いています。この森を彼は震災後に来て「ただ境内の深い森だけが、僕の記憶にある昔と変わることなく時間を越えてひっそりとそこにある。僕は神社の境内に腰を下ろし、初夏の太陽の下でもう一度辺りを見回しそこにある風景を自分になじませる」これは1997年に来て翌年エッセイを出版しています。

(資料を見ながら) 2つの表を合わせて見ていただいたら、彼が少年時代に過ごした原風景がいかに彼の作品に出ているのかがお分かりいただけると思います。1997年に西宮神社に来た。えべっさんの風景を自分になじませたわけです。そのあと2002年に『海辺のカフカ』が出来たわけですが、その中に「2人は低い垣根を越えて、神社の林の中に入って行く。カーネルサンダースは上着のポケットから小さな懐中電灯をだし、足元を照らした。林の中には小道がついていた。それほど大きな林ではない。そこにある樹木はどれも大きく、その密生した枝は頭上を暗く覆っていた。足元から草の強い匂いがした」我々が子供の頃えべっさんの森は、本当は入ってはダメですが金網に穴があいていまして入れた。子供がよく入っていたと宮司さんが認められています。村上春樹も多分入っていたんじゃないか。

『文学界』という雑誌の去年の8月号に文芸評論家の鈴木一成先生がこんなこと言っています。「まるでカフカ少年が海辺のカフカのページから抜け出して、神戸まで歩くのページに移り生霊となって作者に憑依し、西宮神社の境内に腰を下ろす作者村上を思い出しているようである」と、文芸評論的にこの2つはきっちり一致しているんだということを言っていた。それから私は自信満々でこのことを言っています。

先ほど清酒大関の話がありましたけど、『1973年のピンボール』で今津灯台が出ていますね。「やっとなら灯台にたどり着くと、そこの背後には青黒い山並み（これは六甲山です）が空に向けてきゅっと立ち並んでいる。その右手には内側に向かって湾曲した海岸線に沿って静かな住宅街やヨットハーバー、酒造会社の古い倉庫が続き、それが一区切りつけたあたりから工業地帯の丸い形のタンクや高い煙突が並び、その白い煙がぼんやりと空を覆っていた。それが10代のネズミにとって世界の果てである」ネズミというのは人の名前です。今津の海辺の丸いタンクを覚えてらっしゃる方があるかと思いますが、まさにこれは今津灯台から見た情景です。読んでいる人は、江戸時代からの木造の灯台だとは誰も思っていないみたいで、もっと近代的な灯台をイメージしていると思いますが、これは今津の灯台ですね。村上春樹が育った環境という面で見えますと、阪神間ということに関してはこんなことを言っています。「当時の阪神間は、今でもそうなのかもしれないけれど、少年から青年期を送るには、なかなか気持ちの良い場所だ。静かでのんびりとしていて、どことなく自由な雰囲気があり、山や海といった自然にも恵まれ、すぐ近くには大きな都会もある。コンサートに出かけたり、古本屋で安いペーパーバックをあたってたり、ジャズ喫茶に入り浸ったり、アートシアターではヌーベルバークの映画を見ることが出来た。洋服はもちろんVANジャケット」ここで固有名詞に変えます。今と変わらないですけど。これが自分が育った町だと言っています。もうちょっと別の観点で見ますと、彼が育った場所というのはディレクタント、好事家による豊かな地方文化が育った町という言い方が出来ます。さきほどの『海のカフカ』を引用させていただきましたけど。

村上春樹が育った場所の半径5百メートルには個人所有の美術館・博物館が3つあるんですね。今休館しているのを入れると4つあるんです。白鹿の酒造記念館、この壁面がライトアップじゃないスクリーンにして100万種類のパターンが見れるという。今、光の宴というのをやられているわけです。

白鷹のほうは香櫨園駅の北側に考古史料館がある。大谷美術館もディレクタント的好事家の遺産です。菊池貝類記念館、今は休館していますが、4つあります。村上春樹はそのど真ん中で育っているわけですね。さらにこれを図書館だけで絞りますと、村上春樹少年が育った西宮市立図書館、南口にある商店街を抜けてこれは中央商店街です。「小学生の頃、自転車に乗ってよくここまで買い物に来た。市立図書館も近くにあつて暇さえあればそこに通いいろんな種類のジュヴェナイル（少年向き）の本を片っ端から貪るように読んだものだ」どんな本読んだかよく覚えているんですね。2010年に出した『考える人』の中で『海底2万マイル』『三銃士』『モンテ・クリスト伯』『レミゼラブル』この中の3つは私も同じ場所で読んでいます。

さらにロングインタビューで「いろんな本読んだけど小学校3年～4年くらいから急に本が好きになりました。本は親に買ってもらうだけじゃ足りなく自転車で西宮の図書館に行ってよく読んでいました」と書いてます。ここまで書いても西宮の図書館はなかなか出て来ないんですね。全部芦屋の図書館になっているのが残念です。

では村上春樹が通った西宮市立図書館がどんな生い立ちかというと、今、アミティホールの西側に石碑だけ残っています。どんなことが書いてあるかといいますと、「旧西宮図書館は昭和 3 年、郷土の酒造家、辰馬吉左衛門氏の寄付により建設されました。鉄筋コンクリート造りで、スパニッシュコロニアル風の美しい姿を誇りました。それ以来 57 年間、文化の殿堂として市民に親しまれてきました。中央図書館の建設にともない、その役目を果たしました。ここ旧図書館跡にこの碑を建て、永く記念とします」当時の八木市長さんは石碑作るの好きみたいで八木米次さんの石碑あちこち建っています。西宮で育った少年、少女にしてみれば非常に思い出深い図書館です。

神戸女学院のヴォーリズの建物ありますけど、これこのまま岡田山に持って行っても遜色ない建物ですよ。さらにすばらしいのはステンドグラスがすばらしいです。ステンドグラスだけは残されていて、今、西宮に図書館及び分館が 11 あるんですけど、そこに形見分けされて一部分だけ残っています。北口の図書館も入口の右側両サイドにあります。西宮中央図書館には一番大きなステンドグラスが残されております。ぶどうがぶら下がった写真です。『海のカフカ』に甲村図書館のステンドグラスが出てきます。和風の図書館なので、ステンドグラスがあること自体おかしいんですが、上巻 70 ページに「踊り場の正面の窓にステンドグラスがはめ込まれている。鹿が首を伸ばしてブドウを食べている図だ」と書かれている。これはイソップの話でして、鹿が猟師に追われて、ブドウの木陰に逃げ込んだ。猟師は気づかずに通り過ぎたが、ほっとして鹿がブドウを食べた時のガサガサという音で見つかり撃たれた。鹿はどう思ったか、自分を助けてくれた恩人を私は食べてしまったのだから、やむを負えない、諦めのいい鹿ですが、そういう話です。それを書いたんじゃないかと思われるんです。ここには鹿がないんですけど、下に「昭和 3 年辰馬吉左衛門氏寄贈による旧西宮図書館のステンドグラス」。辰馬吉左衛門は白鹿ですから、ちゃんとこの通りになっているんです。西宮の鹿は金持ちですからブドウを食べたりしないで行ってしまいます。

村上春樹は図書館のことをいろんなところに書いています。「学校が終わるとよく自転車に乗って図書館へ行った。そして少年用の書物を集めた部屋の書架から書架へと歩きまわり、そこにぎっしりと並んだ過去や現在のあらゆる国からやってきた無数の書物を眺め、目もくらむような思いをしたものだった。まるで深い森から出て空を背景にそびえたつ中世の巨大な大城を初めて目にした子供のように」というように、図書館で過ごした彼はいろんな形の図書館を小説に出した。『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』の中には、たくさん一角獣の頭骨を集めた図書館が出てきます。主人公の若い男が高い壁に囲まれた不思議な町に閉じ込められ、影を奪われ、その頭骨の語る夢を一つ一つなぞる仕事を与えられた。『ふしぎな図書館』いうのもあります。「主人公の少年は市立図書館の地下に住む不思議な老人に捉えられ脳みそを吸われてしまう。老人は少年に本を読ませ脳みそを吸い取ることでその知識を自分のものにしようとするのだ。少年はそこから逃げ出さなければならないが彼の足には鎖でしばりつけられ・・・」というような怖い話なんです。

村上春樹の原風景として旧西宮市立図書館のイメージというのは大きいと。彼の作品のなかで『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』『ふしぎな図書館』『海辺のカフカ』の中に図書館が出てくる。

ザンクト・ガレンというスイスの図書館なんですけど、これはカトリックの図書を集めている世界遺産の図書館があるんです。これにも関連するんですが、今日は割愛します。

図書館を含めまして、村上春樹の記憶のタンスの情景というのは、おわん山は甲山と甲村家は辰馬家。甲村家という名前も怪しいんですよ。甲山がある村の家というふうにとれば、まさにそのままなんです。甲村図書館は旧西宮市立図書館、高松の神社は西宮神社。『海辺のカフカ』の情景というのはまさに西宮そのものなんです。しかし、こういう定説にはなっていないんですよ。さきほど河内先生が言われた、おさる公園が打出の駅の北側にあります。ここにはおさるが飼われていまして、『風の歌を聴け』の中に出てきます。ここのおさるが死んでしまって、世話をする人がなくて、寄付しようという人も出てきましたが芦屋市が「やめておこう」ということで、檻は撤去しようということに一旦決まった。市民の間からせつかく村上春樹の小説の中に出てくるのだから、保存してほしいという話がでて、でもただ何もない檻だけがあっても不気味な感じなので、ここにおさるのパネルをつけましょうということで作られています。おさるさんがブランコに乗って『海辺のカフカ』を読んでいます。

誰がこういう風になっているかという、もちろん市民なんです。後押ししている人がいるんですね。山中市長が幼稚園児を集めてどんなスピーチをしたかという「皆さんが小学生の間にこの公園は世界でも有名な公園になります」園児はその意味分からなかったと思うんですけど、そこまで意識されているんですね。市役所もサラリーマン社会ですから、上の人がこれだけの意識もつと、それなりに下の人も動くわけです。

おサル公園と芦屋打出図書館、公園の背中に打出図書館があります。村上春樹はエッセイの中でこの図書館は『海辺のカフカ』の図書館だとは言っていないんですが、僕が好きな図書館だとははっきり書いているんです。ということで芦屋市はこの二つをセットにしまして、非常に熱心ですね。残念ながら状況証拠は西宮ですが、世間では、芦屋の図書館だと言われています。

村上春樹の故郷への思いというのがあります。私が村上春樹からもらったeメールの一節なんですけど、「僕は今神奈川県海岸の町に住んでいますが、ここはずっと昔の阪神間の町に雰囲気似ています。散歩なんかしているとほっとします。逆に芦屋・夙川あたりから昔の面影がずいぶん消えてしまったような気がします。本物の海がなくなって寂しいです」非常に柔らかく言っています。村上春樹の小説を読まれている方でしたら、小説の中に海がなくなった、埋め立てられたということにどんな強い気持ちで彼が言っているかはたくさん小説に出てくるんですよ。

『羊をめぐる冒険』の中に突然こんな景色出てきます。「僕は川を離れかつての海岸通りにそって東に歩いた。不思議なことに古い堤防がまだ残っていた。海を失った防波堤は何

だか奇妙な存在だった」。芦屋浜の今の臨港線の延長線にある堤防ですね。「1時間後にタクシーを海岸に止めたとき、海が消えていた。いや正確に表現するなら海は何キロも彼方に埋められていた。古い防波堤の名残だけがかつての海岸路に沿って何か記念品のように残されていた。もう何も役に立たない古びた低い壁だ」『カンガルー日和』より。50メートルの海岸線がよく出てきます。ちょうど芦屋川の河口のところです。「僕は河原に腰を下ろし堤防に背をもたれ、ひっそりと残された50メートルばかりの幅の狭い海岸線を何時間も眺めていた。奇妙なほどにおだやかな5月の潮騒の他には物音ひとつしない」。こういう風に村上春樹が思うくらい香櫨園から芦屋に向けての浜は白砂青松といえますか、湘南海岸に負けないほどの海岸だったんです。32歳のときに村上春樹は雑誌「神戸からの手紙」でこんなことを言っています。「僕が今一番許せないのは自然破壊だ。神戸って自然豊かな町として愛着がある。芦屋の埋め立てや山の切り崩し…醜悪だ。なんでみんなあれに反対しないんだ。訳が分からない。行政も高度成長の続きみたいのことをやっているし、ポートピアも発想としては貧困だと思う。どんなふうに町をキープしていくか考える時代に町をイベントにするべきじゃない。それは東京で十分なんだ」村上春樹は埋め立てに対して、こんなに反対意見を言っている。

50年前に西宮で何があったのか。西宮は町を二分する大きな争いがあったんですね。今は亡くなったんですが、平野孝さんという方の『都市の内乱—西宮1960—1963』という本があります。この間に何があったかということなんですが、田島淳太郎さんという市長が就任されて、西宮沖埋め立て計画と日石誘致を発表した。このときに大阪神都構想が出てきた。宝塚市を合併するというのが西宮市議会で決議された。酒造家中心の日石誘致反対西宮連絡協議会主要メンバーが当時の佐藤栄作に陳情した。西宮の市議会で日石誘致が可決された。しかし市長は白紙撤回した。選挙でもう一度争ったんですね。現職の田島市長が敗れた。新しい市長は辰馬龍雄市長です。酒造家が支持した人が新市長になった。このあとに文教住宅都市宣言が出た。これが50年前あった出来事です。村上春樹のお父さんは勤めている白鹿が支持している、こんな話を聞いていたと思うんです。いま大阪都と言っていますが、この頃、大阪神都という言葉が新聞でもどんどん使われていた。西宮は阪神間の盟主になろうという動きがあった。日石誘致していれば、当時公害防止技術がなかった頃ですから、その後の四日市になっていたということなんですが、これが阻止された。西宮のあるところに行きますと、辰馬龍雄さんの選挙ポスターが残っているところあります。

1969年、芦屋浜の埋め立てが開始されました。68年に村上春樹は東京へ行っています。ですから帰って来るたびに芦屋の浜がどんどん埋め立てられていった。75年に芦屋の埋め立てが完成して、78年に芦屋浜の小さなタウンが出来た。私も実はこの辺りに住んでいましたが、村上春樹はここが大嫌いなんですね。

今日のお話は村上春樹の文学じゃなくて、彼がその作品の中で表しているものの原風景というか、彼の原体験がどんなものだったのかを観点にお話させていただきました。世界

が誇る文学を醸し出した灘の酒が意味するものは酒造家で作った文化的環境だったということ。酒造家と市民が守った自然環境というのがあったはずなんですね。関西で住みたい街に西宮があがるわけですけど、この住環境が残されたのは50年前にこんなことがあったんだということ、そこに村上春樹も育ったんだということを知っていただきたい。

韓国でも『1Q84』が出されたときには、ベストセラーとなりました。中国の上海、最近では新聞で北京のワンフーチンの本屋では撤去されたとか出ていましたけど。私が3年前に行ったときには上海商場とってそんなに大きな本屋ではないですよ。西宮で言ったら阪神のブックファーストくらいですけど村上春樹の本出ています。アメリカのボストンに行きましても本は並んでいます。村上春樹はハーバード大学の客員教授でもあります。スペインのマラガにも本が平積みされています。

スウェーデンアカデミーの2階でノーベル文学賞が発表されます。ここから近い本屋さんには『海辺のカフカ』が置いていました。村上春樹は西宮の景色だとは言っていないが、世界中に西宮の景色が発信されているわけですね。インドのバンガロールの書店でも『1Q84』が出ています。写真を送ってくれたのは、ドクターチャンドラーさんご夫妻です。お二人とも村上春樹が大好きということです。スラムドッグ\$ミリオネアの原作者のヴィカース・スワループさんも村上春樹のファンです。村上春樹の小説を読んでいるのは、海外でもそれなりの発信力がある人、そういう人が好きなんですよ。

西宮にゆかりの作家で世界で有名な人は小川洋子さん。小川洋さんは村上春樹の大学の後輩で、村上春樹の大ファンなんですけど、小川洋さんの本もヨーロッパでは読まれています。

海外で読まれる西宮の文学作品あと一つあります。(写真みながら) バンド・デシネとあります。これは実は漫画とアニメです。これがフランスとかスペインでは非常に読まれています。この中で出てくるのが涼宮ハルヒです。西宮の景色がどんどん発信されているわけです。

もうすぐノーベル文学賞が発表されます。ラドクログスオッズというところでは村上春樹が1位、3位が莫言。ユニベットというところでは1位が莫言、2位が村上春樹というふうにならば争っています。このへんも注目されたいと思います。

河内 あまり酒の話よりは文学の話になりましたが、それだけ注目される作家がたくさん出ているということです。小西さんはノーベル賞取られると思いますか？

小西 非常に静かなんですよ。嵐の前の静けさというか。いつも今頃になると新聞社から電話がかかってきていろいろと訊かれたりします。今年かかってきません。

河内 小西さんの同年輩の人で待機してビール飲んだりしてない？

小西 香櫨園小学校の同級生が、ある場所に集まってカウントダウンしているとか。担任の先生がご健在で、香櫨園小学校には行かずに同窓生一人の家に集まっているんですね。香櫨園小学校でもカウントダウンしているんですよ。先生方が幕を用意して、毎年がっかりした写真が…今年はまだ呼びがないんですけど校長先生が「村上春樹のこと訊かれた

ら困るから小西さん横にいといて」と言われたんで過去2年間はそこにいました。

河内 もしノーベル賞とりましたら、思い出してほしいことは、川端康成がとって大江健三郎がずいぶん時間かかりましたが、その間にノーベル文学賞にノミネートされたのは井上靖。遠藤周作、谷崎潤一郎みんな西宮に住んだことのある作家ばかりなんですよね。遠藤周作は仁川に住んでいて、夙川カトリック教会で洗礼を受けている。井上靖は香櫨園に住んでいました。谷崎は阪神間に長いこと住んだ。村上春樹が受賞したら、ほんとは何人も取る可能性があったという。それから湯川秀樹が苦楽園時代がありまして、学者の実績あげたのが西宮時代なんですけど、文学賞じゃありませんけどノーベル賞をとりました。もし受賞したら10月から夙川オアシスロードがノーベル賞の道に、それをぜひ、言ったもの勝ちなので。ご清聴ありがとうございました。